

巻頭言

過ぎし日の思ひや何処 光陰の還ることなき 行く末思ふ

我が国アカデミアで創出された健康・医療イノベーションの社会実装ビジョンとして、本誌に掲載された講演記録“2040年問題のリアル”の冒頭挨拶の文末に添えたのであった（臨床評価48巻Suppl XXXVII 2021 p. 9）。

その出版から1年前、2020年春、丁度新型コロナウイルスが日本に上陸し、我が国でもパンデミックの強い兆しが見えたとき、当時の公益財団法人神戸医療産業都市推進機構 医療イノベーション推進センター（TRI）で私は全面テレワーク体制を断行した。職場のスペースを半分にし、家賃も光熱費も半減、出張も、通勤手当もなし。デジタルトランスフォーメーションを進める。これは経営改革上またとないチャンスであった。

あれから3年になろうとしている。一刻も早く元の生活に戻したいと性懲りもなく、血税大枚をはたいて政府はワクチンにすがって繰り返しワクチン接種を国民に呼びかけている。これをワクチン無間地獄と言わずになんと言うのか？

考えても見よ、我が国は刻々と、深刻未曾有の国難に向かっているのだ。新型コロナウイルス感染症パンデミックは、国難ではなく日本にとって最大の課題克服に向けて社会の構造改革をすすめる千載一遇の機会であった。

はっきり言おう。元の生活に戻る必要などないのだ。戻るべきではない。私に置き換えて考えてみても、新しくデザインして出発した研究所において、出張はいらない、会議は全てズーム会議。何ら問題なく仕事は進むし、スマホでたいいの仕事できてしまう。この原稿も音声入力で秘書を煩わす事もない。時間も信じがたい位短縮された。余分な会食も一切なし。これを分断と言う人もいるが、変化している現実、今ここにある未来を直視すべきなのだ。降りかかる災いは時として、変革の大チャンスなのだ。

それは歴史においても個人の人生においても然り。そう、是を神の啓示、天の采配と言う。

深くは立ち入らないが、人類の進化は人間の集団生活のあり方によっている。人間が集団生活をするようになり、家族、部族そして国家が形成され文明が発達した。家族と部族のあり方が大きくその国家のあり方を決める。とくに家族みんなでの暮らしは崩壊し、2019年には65歳以上の一人暮らしの高齢者は49.5%になってしまった。しかるにスマホで全世界がつながっている。

コロナによる「分断」はむしろ働き方改革を促進した。千載一遇のチャンスであったと

言うのはこのことである。生産性が低いと言われる我が国の産業を支える構造の抜本的な変革は、つまるところ働き方改革に帰着する。高齢者の雇用促進と生活保障，そこに着眼すれば、デジタルトランスフォーメーションやイノベーション創出による生活、産業、経済の飛躍的な活性化の進め方がくっきりと見えてくるのではないか。

最後にズバリ言うておこう。新型コロナワクチンへの莫大な投資は全く無駄であった。振り返ってもみよ。原子力船むつ、高速増殖炉もんじゅ、重粒子線治療センター、ミレニアムプロジェクト、そしてiPS細胞の再生医療への応用研究、繰り返し繰り返し、科学の誤用と無駄な投資を繰り返し続けてきた。

読者諸氏は知っているだろうか？コロナのおかげで、国の2021年度の税収が67兆円程度となり、過去最高を更新したことを。これまでの最高だった20年度の60兆8,216億円を1割上回る。法人税収が伸び、消費税や所得税も堅調だった。一方で、若年層の格差が着実に広がっており、子供の7人に1人が貧困である。そしてヤングケアラーは中学生で5%を超えている。この歪を放置する社会の行き着く先は目を覆う悲惨である。

今ここで問いたい。

賢明な読者諸氏は2025年問題そして2040年問題、続く2054年問題を知っているだろう。

団塊世代が後期高齢者入りするまであと2年、そして団塊ジュニアが高齢者入りするまであと17年。この間に少子化はさらに進み、その時点で生産者人口は人口の半分を切ってしまう。人口ピラミッドは棺桶形に変貌するのだ。その間に社会資本は刻々老朽化し、容赦なく自然災害がおそいかかる。にもかかわらず、政治家、マスコミこぞって台湾有事と妄言喧しい。ある有名な投資家は日本の終焉を見据えている。もう日本には余裕は無いのだ。健康寿命延伸と要支援・要介護者数激減は待たなしの逼迫せる課題である。

記念すべき「臨床評価」刊行50周年に本号を以て、読者諸氏と来たるべき新しい社会、ラーニングヘルスソサエティーのビジョンを共有したい。

福島 雅典
一般財団法人LHS研究所 代表理事
「臨床評価」編集委員